

特 251

728

大日本野球研究會編

最新
野球理論研究

始



野球愛好の諸君に告ぐ

本邦唯一の野球研究会生る

現代競技中最も進歩せる野球の研究並其の活
用を以て國民体育の奨励精神の修養に資せ
んとす

會員相互の雜誌、書籍發行、大會、コーク磨磨の
派遣、各種興起紹介應需等

前内閣総理大臣 若槻禮次郎閣下
青森県知事 岡谷芳郎閣下
全園著名士大衆各新聞社

賛助

大日本野球研究会

特251
728



最新野球理論研究

大日本野球研究會編



野球研究

大日本野球研究會

五 四 合 博 大 序 表 書

本書は野球を最も平易に何人にもよく本技の真髓と其の活用を知得せしめんがため野球全般に亘り尤も適切にして尤も必要なる理論を記述し以て諸賢の研究資料に供せんとするものなり。追て次回よりは一言耳にして血湧き肉躍るが如き興味ある部分々々の研究をなし益々其の蘊奥を究め而して盡くるところなき快味を充分に掬せらばんことを茲に發刊に際して本會が希望して止まざる處なり。

識者

日本

目次

- 一 總論
- 二 攻撃論
- 三 守備論
 - 第一 總論
 - 第二 投手論
 - 第三 捕手論
 - 第四 一壘手論
 - 第五 二壘手論
 - 第六 三壘手論
 - 第七 遊撃手論
 - 第八 外野手論
- 四 走壘論
- 五 試合ニ對スル注意

◎ 總論

野球は兵學である。
 野球は力技でない。兵學は練つて文を究める用意がなくてはならぬ。

一 野球兵學の分類

大別して外部的の技術練習、内部的の理論研究の二つとする。

二 理論研究の必要

野球が益々盛んになつて来る今日でも未だ理論研究を等閑視してたゞ技術ばかりに走る結果多くの誤解者を出して「野球は氣で以てやれ」と云ひ元氣養成機關の様に思惟する傾向さへ生ずる様になつて来た。こゝを誤解があつたため其發達を妨げたことも少くない。

今日急速に野球技の進歩したのは如上の障害に深く注意し漸く理論研究に意を寄せた結果に外ならないのである。

三 理論研究の種類

(一) 守備論 (二) 攻撃論 (三) 走塁論 (四) 策戦論

(一) 守備論は各位置論九篇に分ける。

(二) 攻撃論は緩打強打の二つに分ける。

(三) 走塁論は盗塁上塁の二つに分ける。

(四) 策戦論は基本的策戦論で之れを二つに分ける。

四球主義 (ウエーテングシストム)

打球主義 (ヒツテングシストム)

四技術練習は疲勞を目的とせず。

研究的練習の壘田は娛樂的練習の百回に優る。

練習の目的は試合にある。

練習は常に研究的に且つ試合を目的としてなすべきである。

練習は技術の優劣に従って適宜に行ふべきである。

研究的練習の結果は勝利を確保するに至るのである。

五 風向の注意

雨雪等のため中止になつた例はあつたが強風のために試合を中止された例は殆んど無い。

試合に際して第一に注意すべきことはグラウンド(球場)の地形であるが第二には其の日の風向に就いて考慮すべきである。試合前ファイルデング(守備練習)に際しては風位に注意し其の投

げる球の上にとどんな影響があるか深く考慮すべきである。投手がプレート(投手板)に立って受けると同じ風向でウォー

ムアップ(肩馴し)をすべきである。

六 科學的練習法

第一選手の團結力(所謂チームワークである)

第二ハードワークの練習の不可

第三 理想的練習法

- (一) 肩馴し (ウォームアップ) を重視するものが多いがこれは
 家庭に於ける基礎に等しいので試合は球の投捕を根本教
 とする上から見て手実たウォームアップは其大木である
- (二) 自由打撃 (フリーバッティング) は球を打つ眼馴しに過ぎな
 い。コントロールを着けた悪い球を自由に打つのを最良
 の策とする。換言すればボールを打つを合はせる練習
 に過ぎない。絶対にはボールを打てばならぬ。スライク
 を打て乱打は正式攻撃に悪影響がある。
- (三) 正式攻撃 (レギュラーバッティング) は出来る限り試合に臨ん
 だ覚悟で行ひ、打者は必ず走者となつてゲームの捲引ラ
 ンニング (走塁) スライディング (土り込み) 等の守備攻
 撃両方面の練習を怠すべき事。

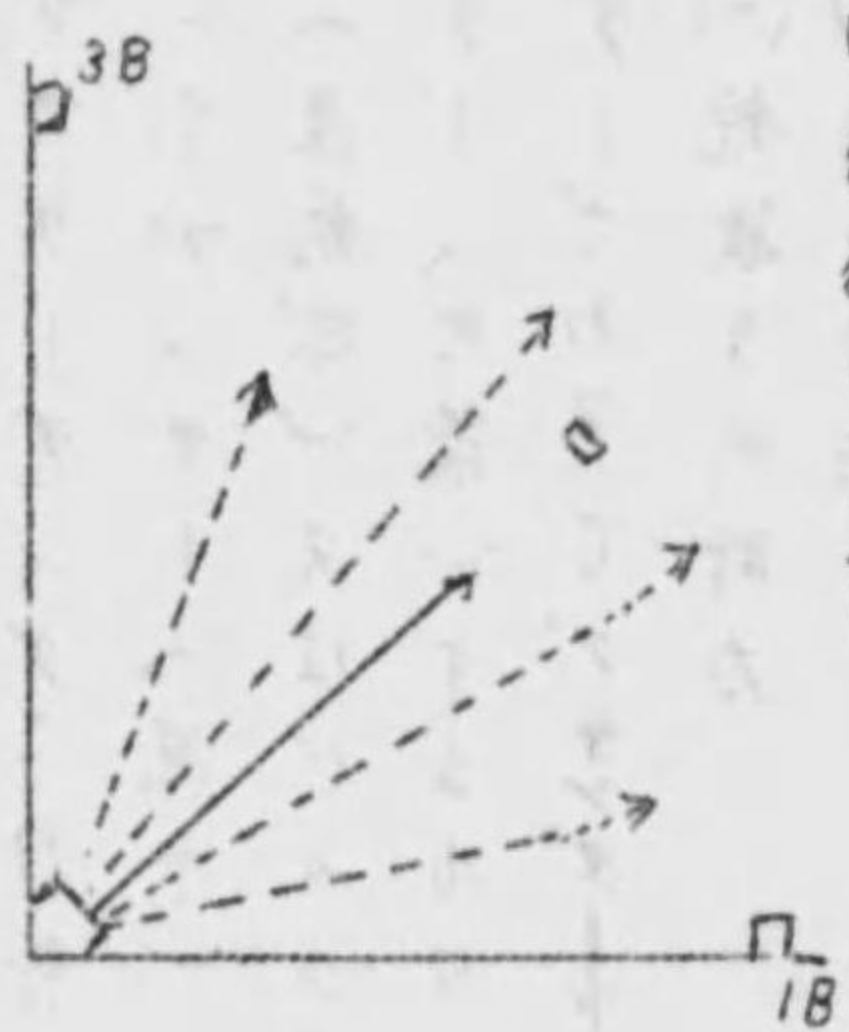
バンドのサイン、サイン (信号) は簡単に感得的の中に其
 のサインを出す様に心掛ける。

(四) 守備練習 フリーデングは野手の観兵式である。
 第一外野のフリーデングは一定時までノックを取り暗闘
 其の内野と連絡を取つて練習すべきである。

第二内野のフリーデング、内野手の中投手は最初から投手
 としてプレーヤー (選手) になつた者はデレクタフ
 イ (直発球) 又はグラブダー (ゴロ捕球) に対して
 エラー (失策) するものである。Pゴロは激きグラ
 ンダーである。グラブダー中第一の難物であるから

- (一) 鋭敏な判断力
- (二) 細い動作
- (三) 一塁の遠い近いに依つてスピート (球速) を変

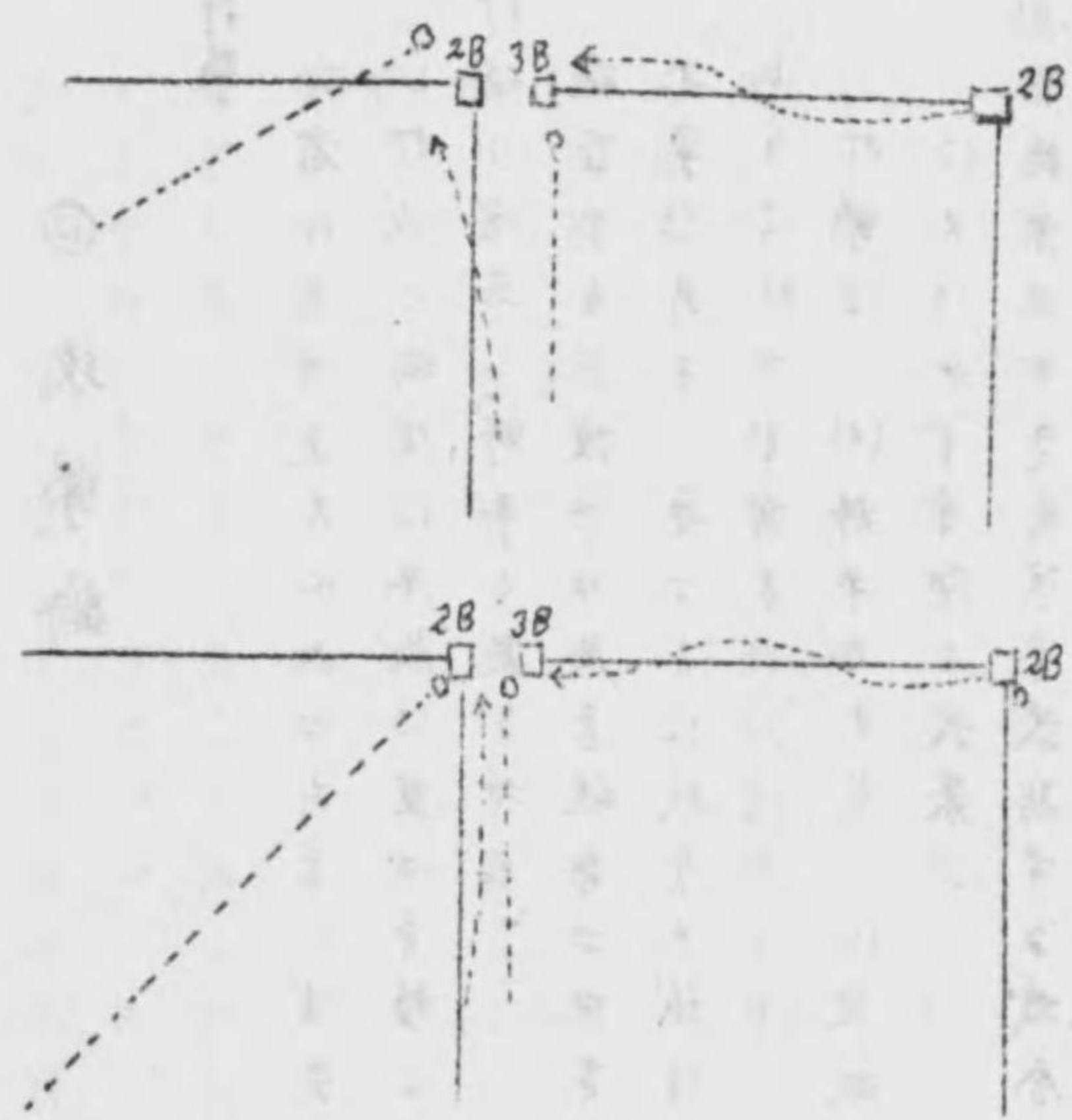
へる事
（四）狼狽せぬ事



上圖の様に二十回位練習し
一壘への投球はライバース
ロウで内側に向って走者に
當らぬ様に投げるがよい。

（五）ヒッ込み（スライディング）の種類

- （イ）ホックスライディング（釣形滑込み）最も重要である左
右何れの方でも機に應じてなし得る様充分に練習すべ
きである。
- （ロ）ボックススライディング（両足止込み）危機一髪の際行ふ
のである。



（ハ）ハンドスライディング（手の止込み）危険が多い上に壘
手に恐怖を興へぬ訳であるから寧ろ用ひぬ方がよい。

上圖の様に高球の時
内側へ低球の時
は外側に
進むべきで
スライディ
ングは型より
も根本精
神即ち何故
滑込の必要
があるかと
云ふことを
考へて行ふ
べきもので
ある。

◎ 攻撃論

(一) 打撃

打者がボックスに入つたならば先づ右足に全身重心を集中し打球の瞬間に左足に重心を移して打て

(二) 打球の標準 「野手の足を折れ」

換言すると投手の足を覗むゴロを打て。直球を飛ばせと云ふ事である。要するに投手の球はなんでも打てば可いと思ふのは誤りである

打撃は (1) 野手の失策 (2) 受球者の失策 (3) 或場合走者にタッチする際の失策

此の三つの失策を克服する機会が最も多いグラウンダーで得点する能率が最も多いと云ふことを念頭に置くべきである

(三) ニツの方法

(1) 極端主義 ショートスウィング

(2) 中庸主義 ロングスウィング

(1) はバット(打棒)の或一點ばかりに球を當てる方法を云ふ。即ちバットを短く持つてショートスウィングすると云ふことは打撃の中心を短くする故餘り得策と云ふことが出来ない。

(2) は前の方法と同様球の當る個所は定めて置くことは勿論であるがそれ以外でも飛ぶといふことを意味してある。然しこれは單に理論に過ぎない。で実際はバットの長短各々の型重量、体格等によつて相違するのである。

中庸主義が得策であると云ふが強打者の持つ細長いバットを手許に長く持つてロングスウィング(大振り)するときは其の好い當りをする個所に限られ廣い部分の何れに

當っても相當に飛ぶものではない。而してロングヒッターに限って細長いものを使用する。勿論例外はあるが……シヨートスウイング（小振り）する者は多くバットル式のバットを使用する。

此の二つのスウイングはボールが必ずバットに當るとき、の理論であつてバットをボールにあてるまでには勿論目の練習にも依るが二者中何れが容易いかと云ふとシヨートスウイングが得策である。

(四) 結論

ボールのバットに當る範囲廣いバットル式バットを使用して餘り短く持たずに振るのを得策とする。

(五) バットの重量

バツテングは前述の如くフライ（飛球）を避けてグラウンダー或はライバーする強球を打つのを目的とする以上バットとボ

(六) スウイング

バットは軽く持つべく餘り強く握って居ると振る際に汗の爲め滑るとか紐を損ねるとか云ふことがある。然しあまりに軽

ールがミートする時バットの全力を加へるのを理想とする。即ち我々が自分の身体を同じ力で同じ個處に打つのに弾性ある軟と弾性の乏し木片の様なもので打つときは其苦痛の度の異なる様に當る時其物の質量と速度との相乗積に正比例して其の度が異なるものであるから極度に重いバットを使用することか有利である。然し長短異なる所其人のスウイングの如何に依つて異なるものであるから一般に自己のスウイングに差支へない限り極度に重いものを使用すべきである。

結論

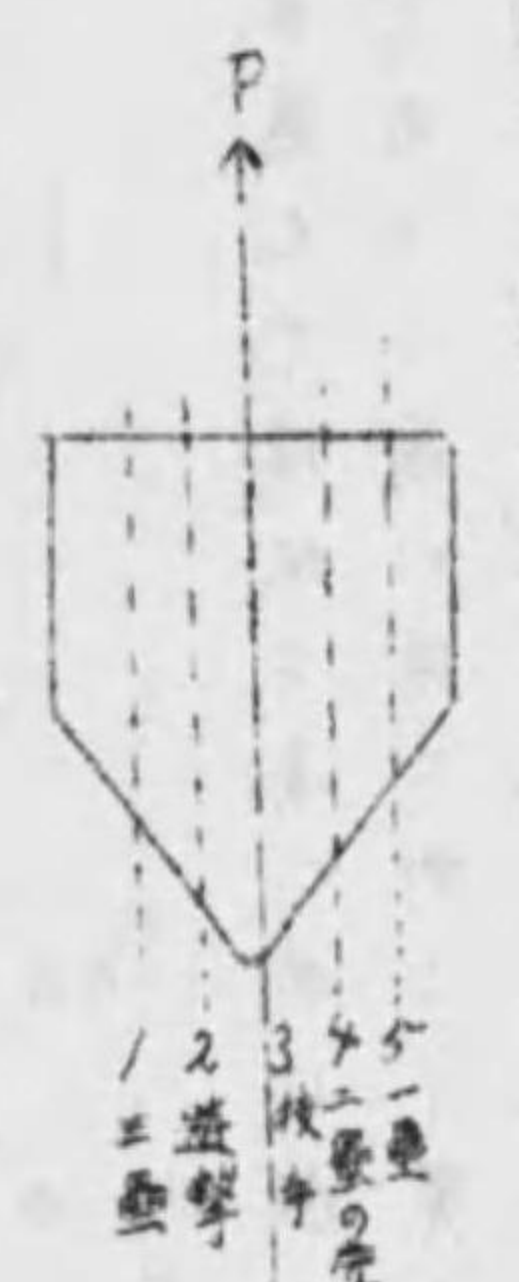
バットはスウイングに変化を及ぼさぬ程度の最重量のものを使用するを可とする。

く持っていていざと云ふ時急速に力を入れる時は拘ひ上げるから自然飛球になる事が多い。だから中庸を得て固からず緩からず相當り力を以て握り打つ時堅く握って振れば狂ひが少い。フエアーヒットを行ふときは身体力力はフエアーグランドに向つて傾注せよ。假りに身体及び氣味になつて振つた時はバットに加へられた力は双腕の力ばかりで身体力は他にある故スタート（踏み出し）に困難を上に打たれた球も弱勢である。全力を傾注するには右打手は左足に左打者は右足に重心を移して振るべし。

(七) ステップアウト（踏み出し）

これを實際に行ふ人は少い。多くの人は無意識にステップアウトをするが輕視せず充分に練習すべきである。假令右打者が速い球を打つたとするにビシツと云ふ音がして三壘方面へ飛んだとする。是れは完全の當りでなく實際は一壘方面に打

(八) ステップアウトの練習法
打者練習の第一義



つのが自然であつて又有利である。

ボックスに入つて投球がストライクであるかボールであるかを判断すると同時にストライクであるか否かは上圖の何れの方

面に属してゐるかを判断し其方向にステップアウトすべし。前圖の第三線の球を打つには其の球の線に平行してステップアウトし其線の直角にバットを出せば投手方面に飛ぶ訣である。

だが實際の球は捕手に達する時左右に擴がるものである。即ち次圖の如くである。故に第一線の近い球はバットを直角に

出すときは全力を籠め難くして不利である
バットは常に第三線の球に對しては直角に出すべきである
第三線を除く他の球理想的に打たれたらば反對角は入射角
に等しく各夫々の入射角に等しく打ち返されるものである



此五線を大體鑑別してステツ
プアウトは此五線方向にた
されるものであるが近邊真中
の三つに區別してステツプす
れば可である

更に一歩進んでは球の高い時は狭く低いときは廣くステツプ
すべきである。高い球に對して廣くステツプすれば打つても
球勢が弱い。低い球も此理である

◎ 守備論

第一 總論

(一) 内野手のグラウンダー
常にボールを弄ひ決してボールに弄はされぬこと、ボール
に對して少くも弱点を構ったならば必ずボールに弄はさ
れる。グラウンダーに多く接する選手は常にグラウンダーの研
究を怠らずこれに向つては躊躇せず不安の念を抱かず決し
て球に逆はず自然的に球勢に従つて動き、緩球が打たれたら
ば直ちに前進して捕へ自信力と決断力が最も大切である
多くの若い選手がグラウンダーを處理するに巧みでありは如
何にして取らうかと考へつ、球の来るのを構つて前進せぬ
からである。グラウンダーに對しては常に自衛的に出て受衛
的態度は球に負ける結果になる。不自然の捕球は投球動作

を妨げ両足を揃へて捕球してはならぬ。後逸を防ぐ動作であるが動作の自由を拘束する結果不利である。ボールを逃すより寧ろ身体又は手で以て止めよ。グラウンダー捕球の第一義である。捕へし球は足を踏み締め姿勢よく投げよ。二塁手は如何なる姿勢でもスナップ又はアンダー스로ウを投げ得なくてはならぬ。

(二)ゴロの捕へ方

強いグラウンダーはグラウブを引気味にすればよい。握らうとする必要はない。弱いグラウンダーは稍握り気味に捕るべし。内野手の初心者走者を見ながらグラウンダーを捕るのを見るが此れは失策の基である。選手は何事に依らず豫め次の仕事を如何にすべきかと考へる必要がある。先づ最初の仕事を遂行し次の動作に移らなくてはならぬ。第一の仕事と第二の仕事とを混同して行へば

失策が多い

(三)外野手のグラウンダー

内野手同様の注意が必要であるが出来得る限りシニア(確實)にスナップする必要がある。但右翼手が一塁に投げて走者を刺し、一塁走者の際強いグラウンダーを中堅手捕へたならば直ちに二塁に送って一塁走者を刺し左翼手も又同様の場合がある。斯る例外は有れども以上の様を動作を完成したならばツインプレイ(美技)と称される。假令失敗したとして失策にはならぬ故以上例外の行動は一般的グラウンダーの備ではない。我國には未だ完全なグラウンダーが無くグラウンダー、バウンド不規則であるため外野手の失策が多い故。飛球よりグラウンダーに特別の注意を拂ふべきである。

(四)フライ(飛球)の捕へ方

外野手は直飛球共グロウブの指を上に向けて捕るべし。指を上に向けてるのは

一見危険の様であるが下に向って取るときは球勢強いため
ハシブルして胸を打つ恐れがある。

内野手の直球は前と同じ方法

飛球は前腕を肩迄上げグロウブの指を自己の顔に向けて取
るべし。極めて高い飛球はグロウブの背を地上に向け鼻の
辺に見當を付け胸の辺にて捕るべし。何故かといふに内野
フライはバツバツにきり此弱いからである。即ち捕手フライ
イと同様であるから自己の前方に流れる性質があるからで
ある。

(五) 守備姿勢

両手を膝に當て前半身を屈し両足を一杯に開いて居るもの
がある。これは大に熟考を要する姿勢である。

態べての野手は打者に面して立つべし。

足を七分に開き投手が投球と同時に尻先で立て、これが自
然であつて又スタートに自由である。両手は何れに置いて
も自由であるが体勢の儘前方に出すのが最自由であらう。

(六) タッチ

走者にタッチする時ベトスウ後方に捕球し走者を壘の前方
に滑らせる様にすべし。後方から滑り込まれる壘手は赤熱
と云はねばならぬ。壘の前方を守るときは走者前面に道を
得て衝突スパイクの危険を避け得べし。

タッチは迅速にすべし。球を確実に握りタッチすべし。
多くの走者は衝突などによつて落球を豫期する者さへある
故斯かるプレイは迅速正確勇氣の三つを備へて居なくては
ならぬ。又走者やコーチヤーの威嚇的言動に惑亂せられて
は不可である。

若し走者がスパイクを上げて脅かしつゝ、衝突せんとしたるらば躊躇せず球を固く種ってタツキせよ

第二 投手論

(一) 投手の五大條件 投手要件を%に現はせば次の如くである

(一) 沈着 二五%

(二) 明晰なる頭腦 二五%

(三) コントロール 二五%

(四) カープ 一五%

(五) スポート 一〇%

我國ではカーブに長ずる者を良投手と言つて速球が得意な者を優投手と言ふが良投手とはこんな種類のものでない速球にも曲球にも巧みでない投手が往々成功する事がある (四)と(五)とは良投手たる一條件に過ぎない

沈着と明晰な頭腦とコントロールとは投手の三大條件であつてカーブ速球は素より必要であるが之れがなくとも決して投手として成功を得難いとは言はれぬ 我國の投手中には(一)(二)(三)を併せ有するものが無いから(四)(五)を投手の必要條件として打者を瞞着しなくてはならぬ 投手の第一に練習するはコントロールである

(二) コントロール

コントロールは打者の欠點を觀視し適確に投球し得る其可能を云ふのであつて捕手のサインに依つて投げ得たからと云つて未だ完全なコントロールと云ふことが出来ない コントロールは常に練習中會得しなくてはならぬ 打手の欠點を見出すのは自己の沈着と明晰な頭腦とに依つてなされるより外に道がない であるから練習中は自己の欲する個所に投げ得る投手力を養ふべし

(三) コントロールの練習法

- (1) ベ이스の中心を通過する球
- (2) 低いアウトコーナーを通過する球
- (3) 低いインコーナーを通過する球
- (4) 高いアウトコーナーを通過する球
- (5) 高いインコーナーを通過する球

此の五つを自由に投げ得れば充分である。捕手にミットを以て其位置を示させ投球すべし。打者が立った時と立たない時は投球の具合が違ふものだから注意すべし。

コントロールの練習は一定の投球モーションに依るべきである。オーバーバースロー、アンダースロー、サイドスロー、各々自由自在に投げる必要がある。

(四) 投球の練習

練習の始めは徐々として緩球から投げ決して最初から強球を

直ぐ投げてはならぬ。先づ緩球に馴れたら次第に速球に

- (一) 緩球 (ウォームアップ) 三〇
- (二) コントロール 五ヶ所 各々 一〇
- (三) カーブ 三〇
- (四) カーブ、スピード 交互に二〇
- (五) 再びウォームアップ 一五か二〇

合計一五〇回投球すべし

◎ スピードは練習に依って増加する

毎日熱心に練習すれば如何なる人も相當のスピードは得られるもので非常のスピードは生來なれど投手として充分なスピードは練習に依って何人も増加することが出来る。然し餘りに弱肩の人は練習しない方がよい。強肩な投手は全チームの志氣に刺すること大であるから一ニ三を併せ有して居ない以上相當のスピードを持つ投手はチーム全体の志氣を鼓舞し得

べきである。

A ストリートボール

(一) 握った何の指にも縫目の當る様

(二) 握った何の指にも縫目の當らぬ様

(三) は(一)より比較的カーブする。此の握り方でオーバースローするときはインドロップ気味の球が出る。

B カーブ

スピートに巧みでコントロールのよい投手はカーブは投げざる必要のないがコントロールが悪い投手は普通四個の中一個の

カーブを投げよ。カーブは速球に熟練した後練習すべし。

カーブは打者を振らしむるでなく自己のコントロールの欠點を補ふものである。

(一) ドロップ (二) アウトドロップ (三) インドロップ

(四) ドロップ 非常に困難である。

(イ) 手の甲を地上に向けて投げる。

(ロ) 普通投球と同様に投ず。

二つの投げ方あり。此球を投げるには充分身体を使って球が

手を離れた後にも尚其手を止めず自己の手許に引けば大きいカ

ーブが出る。

(ニ) アウトカーブ 手の甲を地上に向けて球に垂直の廻轉を興へ、

球の握り方はドロップの場合と殆んど同様である。これを

投げるに最も容易な投方はサイドスローであるが特殊のモ

ーシジョンになり易い故注意すべしである。

(一) と(二)の中間にアウトドロップあり。斜を廻轉を興ふ。

ドロップカーブ、アウトカーブを練習すれば何人も會得

が出来る。此球は投る有効である。

此外インカーブ、アップカーブ等あるが以上の三種を習

得すれば充分である。總て投球はスピートもカーブも同

じ速度でなくてはならぬ。

C. スローボール

誰人も知り乍ら練習する人が多い。スローボールを投げる動作は速球を投げる動作と同一でなくてはならぬ。ただ握り方の相違ばかりである。其の握り方は深く手の平にボールを當て指の間から投げて行く様に投げ球に廻轉を與へぬこと。

(五) スローボールを投ずべき場合

此球は弱打者に投げては不可である。強打者に對し魔球も直球も無効の時として打者がストライクを豫期しなるときはかりに投ずべきものである。

(六) ニ壘投球

(一) 捕手のサインに依る。

(二) 自己のサインに依る。

(三) ニ壘へ入るプレーヤーへニ壘手又は遊撃手のサインに依る。

ニ壘に投げるには壘の上に投げてはならぬ。ベースを眼中に置かずニ壘に入るプレーヤーが走り乍ら且つ夕ツ手が出来得る最も都合のよい個所に投ずべし。即ちニ壘手の時は一壘側一歩離れた位の所遊撃手の時は之と反對側に投ぜよ。

(七) 遊撃手がニ壘へ入った時

遊撃手がニ壘牽制に入壘した時打者が遊撃方面を襲ふ癖ある者であつたならば本壘に投げるに充分の確信ない限り投げて不可である。

ニ壘への投球動作をしても、したゞけではホークニングにならぬ故牽制が容易である。

(八) 投手の策戦

投手は常に打者の弱點を窺ひながら智慧競べをする故投手打

若は打球の按配を知つて次の球を豫期する
 エストライク、二ボールの後にはキックとアウトドロッパを投
 げるが不文律とも云ふべき方法であるが常に此方法はかり用
 ふる投手は無能な投手として必ず打たれる。別種の球を交互
 にスローと魔球と交代に或は速球二つに曲球一つと云ふ様に
 無限の變化ある按配法に依つて打者を苦境に置くべし
 (九) バンドに對して

A 煙轉激しい故両手で捕る事
 B 打球動作の敏活は球の速度の不足を補ふに足る故に投球
 のシユアー(確實)を期するにオーバースロウは極めて
 安全であるがサイトスロウに近しいものを以て得策とする
 C カイブをバンドした時は三塁側に繋がるからカイブを投
 げる時敵の注意する要がある
 (五) スクイズプレー

スクイズプレーの計画を視破した時はウエストボール(ツリ球)
 を投げてバンドを防ぐ可し。バンドは本壘に走者を殺すこと
 が困難である。若しバンドされたならば一壘にランナーを殺
 す可し。(満塁の時も同じ)
 此のプレーを視破した時はホドイスイング(投球モーション)
 をしてよい。若い走者は直ちにホームに近づく走らる。其時
 ウエストボールを以つてバンドを防ぎランナーを本壘に刺す
 トリツタである。

(二) ヒットされた時
 投手は投球と同時に野手となる
 の走者なくして内野に打たれた時
 (三) 一壘後衛の可否
 投手は一壘を後衛する事がある。或者は斯るプレーは絶対に
 不可であると云った。然しそれは賛成し難い此のプレーは投

手を疲れさせるが是非一塁に殺すべき必要が多少は投手の疲
勞と云ふ犠牲を拂ふりも是非かきい。他に投手の身体を休ま
せる手段も多々ある。此プレイは萬一の悪球を後衛する目的
以外走者の走力を鈍らすに目的がある。非常に巧妙に行ふ必
要があつて試合の前半には殆んど行はない方がよい。

(三) 外野に打たれた時
飛球の時其位置を變へる必要がない。

走者あるときはカバ(後衛)する要あり。

(四) 三塁後衛

(イ) 走者一塁にあり右翼に打たれた時

(ロ) 走者一塁三塁にありヒットされた時

共に三塁を後衛す。

(五) 外野投球の目標

(イ) 二塁に走者あつてヒットされた時本塁前適宜の位置に立

第三 捕手論

(一) 勇氣

勇氣は野球選手に必要な條件であるが殊に捕手には必須條件で
あるが殊に捕手には必須條件である。勇氣乏しい者は如何に
輕快であつても成功し難い。

(二) 偉軀

本塁を守るに種々の障害起る故に走者に衝突するとヒクと
もせぬ重量ある體軀の所有者こそ本塁を托するに足る。且つ

つて外野手投球の目標と存れ

(二) 一塁二塁に走者あるときは(イ)と同じ。投げられた球が悪

るければ一塁に居た走者の走る塁に投ず

(ホ) 三塁二塁走者の場合は(イ)と同じ

(ハ) 満塁の時も亦(二)に同じ。

捕手は投手に對して最好目標であるから投手のコントロールを得るに便し更に又巨大な捕手の捕球は徹して審判者の眼にストライクに映ずる利益がある。尤も巨能の人は短能の人に比して遅鈍な短能があるが迅速輕快は他のボジションに捕手よりも必要の箇所が多い故何れかと云へば捕手は素早動作の必要を感ずる機会が少ない。且つ巨能の捕手は短能のものに比べて廣い範囲に捕球し得るが故輕快よりも巨能を選ぶがよい。

(三) 捕球

捕球は危険な仕事である。初心者捕手は打者より離れ過ぎて却つて危険の度を増すのである。遠く離れば危険から離れる様に心得へ打者は密接すれば球の方向を轉ずる餘地が無いからフォールチップに傷く事か無いと云ふ事矣を知らない打者に密接して立つ捕手は投手に好い標的となる。殊にワイルド

の癖のある人、カトリックを投げやうとするのはコントロールに難い。つけ易い。

(捕球動作)

- △捕手は投せられた球を出来る限らずストライクに見ゆる様態上に捕り審判者に好印象を與へる様に勉めよ。
- △(母指の保護) 捕球の際母指を他の指に密接すべし。
- △(ボールのスタツピング) 捕球に大切なことはボールのスタツピングである。即ち多くの捕手は捕球の前足を前方に延し捕へる時急に手前を引く手の痛さを承ける爲であるがそれは大なる誤である。此の様な捕り方は審判者の眼に不良に見ゆ。審判者は球道に依るより多くは捕手の捕球の仕方によって判断するものであるから捕手は投手より投げられた球の通りに盡く毎の手を差し延べ捕球すべし。決して伸ばしたる手を反對に引かぬこと即ち腕を壘の中心の

トライク圏内に向ふ差出した俵捕球すべし。ボールもストライクらしくホームベースの中心に持ってゆき捕球する様に心掛けよ。

ボールの多いのは全員の志気を落とすこと大であるから捕手の捕球の巧妙なるは投手を助け且つ全員を助ける故になる。この練習は鏡に向つてなすべし。

(四) 投球

上述の腕を差し伸べた儘の捕球は投球のモーションを節約する利あり。捕手の必要なるは資望せんとする走者をスナツプロウで刺殺することである。此のスナツプロウはオーバーバースロウに比して時間を短縮す。捕球に腕を引く時は投球はオーバーバースロウでなければ投げづらい故に各捕手とならうとするものはスナツプロウを完全に投げ得るまで練習すべし。
△強肩は捕手う必要を条件である。強肩で亦く正確に投げ得ぬ捕手を持つのは敗因である。だからフリーデングの

際真の試合と思つて投げよ。ノックカーは其必要上へバッターの替りとして) ベースより退く必要がない。

(五) 捕手の悪癖

打手がバットを振る毎に目を瞬く事あり。捕手の價値を減殺にし仕事に危険を増す悪癖である。此れを直すには只練習にあるばかりである。

(六) 消極的コーチング

捕手は崩り要の様なもので全員の位置を一目に見渡して居るのだから他の野手の察見し難い欠點等を注意する事が出来る。フライの捕り手を聲を上げて定める等消極的コーチの道例である。

(七) サイン(信号)

なるべく少いと可とする。カーブ、直球、緩球、ツリ球位に定めて置くがよい。カーブは別々に定めらるるもよいがな

るべくは一つにする方がよい。
 (一) 指一本 (二) 指二本 (三) 指三本 (四) 一本と出す (五) 手を握る (六) 手を握る (七) 握りて動かす (八) 握りたり握りたりする

以上は現に行はれてゐる方法であるが投手が見易く且つ敵のコーチヤーに知れぬものがよい。

△サインを出して立ち上る時ミットの下に消さず上に現す癖のものがあるがこれは改むべきである。若し看破されたるらば反對に用ゐるか多数を出して其の中や或一つを用へよ。殊に二壘走者の時はサインを看破され易い。尚走者が走るらしい時捕手がウエストポールのサインをなす時敏捷な走者が此のサインを看破すると暫く走る動作を示してボールを多く出さす事がある。

(八) ダブルスチール(重盗)

一壘三壘走者の際重盗の企てられし多し好時機であつて成功の機會も亦多い。

第一法 (一) 投手の投球と同時に一壘走者二壘走者に向つて捕手が投球すれば三壘の走者が入壘する。

第二法 (二) 一壘走者故意に壘を離れ捕手をして一壘に投げしめ一壘二壘間に狭撃せられ一壘より二壘に球が達する頃三壘走者本壘に走る。

第三法 (三) 投手アレトに立つ時一壘走者突然二壘に走り投手が眼傾して二壘に投球すれば三壘走者本壘に入る。

若し投手が投球しなかつたならば(二)の場合の様に二壘間に狭撃されるのである。
 (一) のスチール最もよく行はれる此場合投手の捕手に投球される以前ダブルスチールの行はるゝのを想像したならば殊更注意して一壘にある走者を離れ壘をささない様

△外野イン

に勤め而してトリツクウのサインを出しウエストボールを投げさせ捕球と同時に出来るだけ速に二塁に届く低い球を投げよ。多くの打者は此場合一球待つ故ストライクを投ずべしと云ふ論者があるが打者がシニユーパツターであればストライクを逃す事がないことと思はなければならぬ故そんな危険を犯さず二塁投球に便なウエストボールを投げしむべきである。此のトリツクは非常に強肩な捕手が練習を積んだ後でなければ成功し難い故に試合後又はクロスゲームの際其の一點非常に貴重を場合は行つてはならぬ。

(九) フォールフライの捕り方其他の注意

△フォールフライは練習に依る外多くバツトの音と同時にスタートすべし。敏捷な捕手は遅延な捕手よりも捕球は巧みであるがスタート早ければ既重なりとも捕り得べし。

△キャッチャーフライは總て其の投方に流るゝ故にフォールグラウンドに於てフライを捕ふには自己の鼻に見當をつけよ。而して投手の方に向つて捕るときは手を伸ばした其處へ落ちる位にてよし。

△欲撃の守備

三塁本壘間の欲撃は捕手は餘裕ある場合は壘線から二三呎退き高球に備へ走者愈々迫り来て本壘に近らうとした時は壘の上に立ち密るべし。これは危険であるが一點を許すか許さぬかの場合止むを得ない。

(五) 結論

要するに捕手は偉大な体格明晰な頭腦を持つことと理想とする局面に起る重要なプレーを常に突進の間に履理し又味方と敢闘奮闘し各野手に警式を與へ全チームを引き緊める役目を有してゐる。投手とは勿論各野手と意志の疎通をせしめ

充分理解し合はなければ捕手の任務を完全に遂行し難い。又ゲームに勝ち難い故に捕手は謙譲の徳を養ふべきものである。

第四 一壘手論

(一) 資格

体躯の偉大、素早い判断力、打撃。

△一壘手は投捕球が巧みであつても打撃力が乏しければ其の資格がないものと云はねばならぬ。

△前節に於て捕手は迅速と云ふ事はさほど必要がないと云つたが以下述べんとする内外野手で敏捷軽快でなかつたまらばそれは野球選手として資格のないものと云はなくてはならぬ。

△一壘手に於て殊にさうである。

△一壘手は他の野手よりも投げられた球の自然の方向にミツ

(二) 捕球

トを突き出し捕へよ。それは他の壘へ投げらるに自由であるからである。

△両手で取得する球に對して決して片手で捕るべからず。然し一壘に投げる各野手の球は多少根拠氣味であるから悪球が多い故に一壘手は敏捷に且つ確實に高低自在に處理する才能が必要であつてシングルハンド(片手)で捕り得る球は決して通さぬ迄練習すべきである。

△捕球の役長く壘にある必要がない故素早く離壘する習慣を養ひよ。これは走者に衝突する危険を防ぐ爲である。

△壘の内側に足を付り捕球するのを原則とする。この方法は他の内野手よりの距離を短縮する、若し一壘手が壘の外側に捕球すれば距離遠く且つ走者の妨害に成り烈しく衝突する恐れがある。

(A) 二壘方面に打たれた時

△球が二壘方面に打たれたならば直ぐに壘に返り左足を壘の内側に付け右足を二壘の方向に向って捕球すべし。若し投球が高いと思つたら右足の爪先を壘の外側に付け左足をフオーレルライン外側の後方に置いて捕球すべし。

(B) 高球のジャンプ

△更に高い球は壘の内側でジャンプ（飛びつく）すべく決して外側にジャンプし走者の妨害をしない。

(C) 足の位置

一 壘手は足で壘を知覚し得る練習をすべし。

(1) 壘に立ち球の方向に足を延ばして捕る。

(2) 離壘して立ち捕球の後足を踏む。

(3) 壘は得策すべし。

(4) 最初全く壘を離れて立ち捕球すると同時に壘に觸れる。(4)

(5) 折衷法である。

(三) 守備

(D) 最大困難

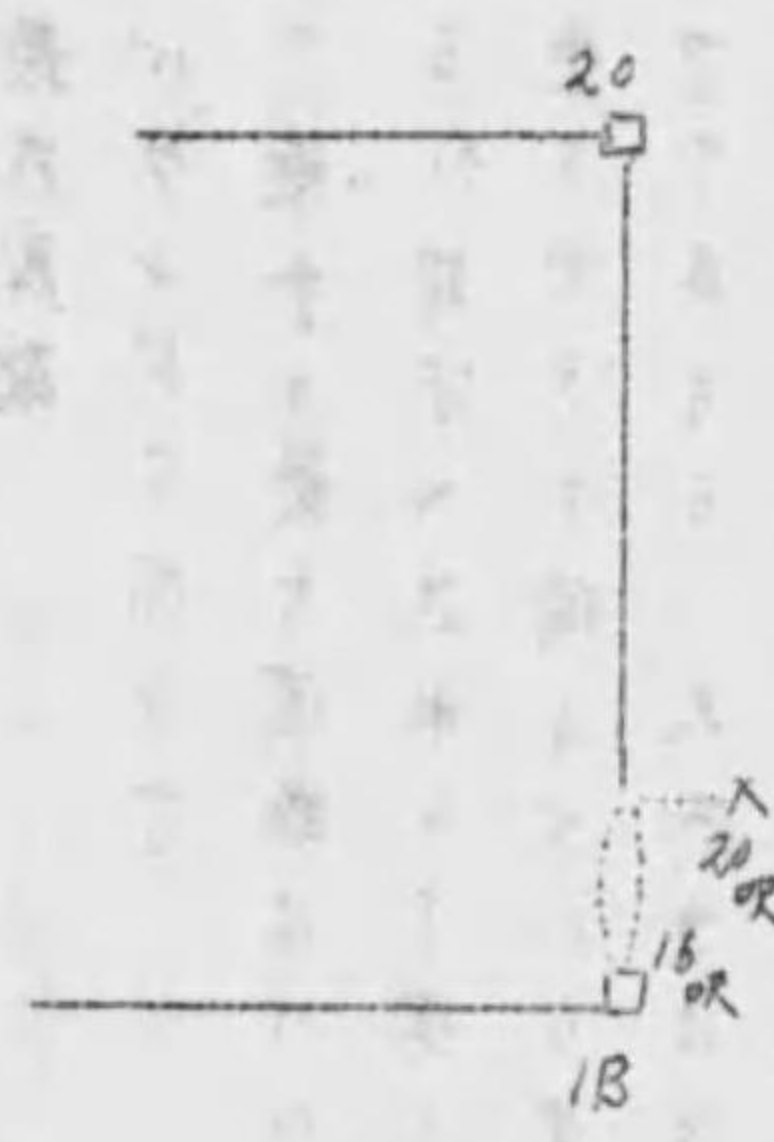
(1) を理想的とする。即ち球が右方面にかたむいて投げられたいならば左足を壘の右端に付け右足を前に出す。暴球を水は離壘して取りタツケするが壘へ触れるか、横足に應ずる手段をとるべし。

(E) バウンドの捕り方

一 壘手の最大困難はバウンドである。片足を前に出して捕るか前方へ進出して捕るか速かな判断が必要である。然し壘の後方で捕るべからずバウンドはグラウンドの地質に依つて異なる。又雨後は低く地の堅いとときは高い。こんな點は試合の前に好く注意すべき事である。

△以上の練習はフリーバッティングの際必ず壘に投げさせ練習すべし。此時落した球を素早く拾ひ上げる練習もすべし。

壘に走者のない時は圖の様な位置で守れ。此は普通の守備位置であつて打撃力弱い時は幾分か加増する要がある。指左右打者に依つて変更すべし。其他他の壘に走者あるかスクイズプレーを企てられる場合は変更する事勿論である。



茲に指定した距離も其人の走力の程度に依る。要は打たるのと同時に帰壘し捕球するに幾何か餘裕あるはよい。

(2) 壘に走者ある場合

左足の踵を壘に触れて◇の内側に投手に面して立つ。投手が一壘への牽制球は何等のサインを以て行はれなければならぬ。

(6) タッチウ仕方

牽制球をタッチするにシユアに握らなければ落球することあり。萬一タッチし損じても改めてタッチせぬ方がよい。二度目のタッチモーションに依つて最初のノウタッチを知つてセーフを宣する不利があるからである。

(c) 走者一壘にある時

走者壘にある時壘上にあつて出来得る限り走者を離れさせぬ様心掛け既にして投手が本壘に投球モーションを起した時は再び壘を離れ深く壘の後方に位置すべし。勿論走者は投手のモーションと同時に離壘するばかりでなく往々敵を欺いて盗壘モーションをする。斯かるとき一壘手は壘の後方から走者の行動に注意して其実否を見極め若し走者が二壘にスタートしたならば大声で叫ぶべし。此声を耳にした投手はウエストボールを投げて走者を二壘に殺す機會を促

す。されど餘り此注意を屢々するときは一壘のコーチヤ
が真似し投手に邪球を多く投げさする危険があるから「ソラ
」出々等の様を簡單にサイン言葉を投手との間に定の位置に
て看破せられたら直ぐに変更すべし。

△捕手とサインを取り交はす事が必要である。一壘の走者が
離れ過ぎた時はそれを刺殺することにある。投手が捕手の
サインを受けサレットに立つ前捕手に向つて「投球せよ」と
のサインを支ふ。此のサインは自己が無意識にする様ツボ
ンを叩くと云ふ様を簡單を日常普通のものではなくてはな
らぬ。是に對する捕手の承諾のサインも屈んでミットを以て
地上を擦ると云ふ様を同じ簡單なサインを以てすべし。

(d) バンドの心得

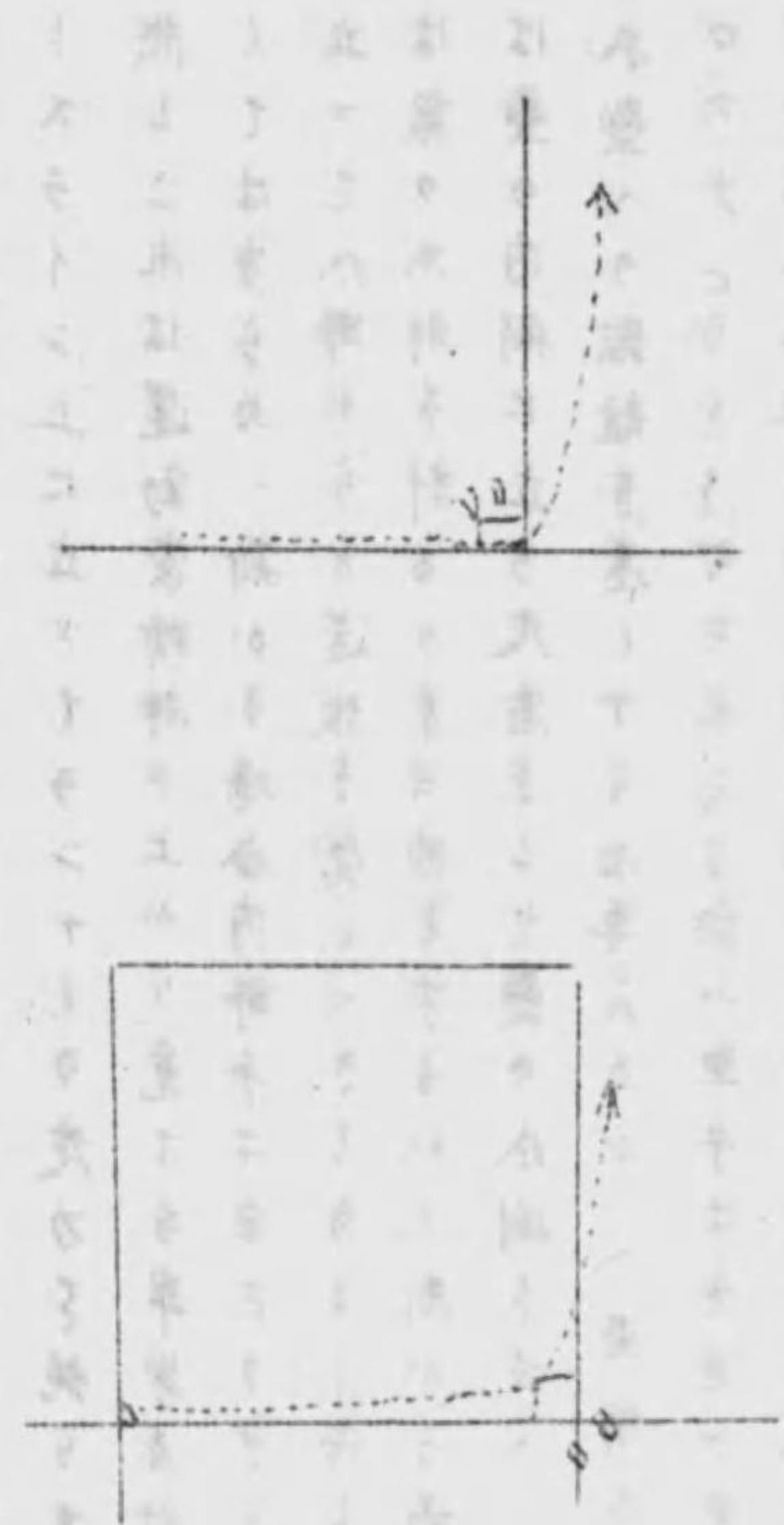
△一壘二壘に走者ありクロスでバンドを豫期した時一壘手は
ベースラインを超え本壘から約二〇呎の距離に立ち打たれ

た球を三壘に投げて走者を刺す。此の場合グラウンダーが打
たれたら金は全速力を以て一壘に入ること。然し此れは危
険な仕事であるから餘り行はれぬ。

(e) ロングヒットされた時の各野手の心得

△ロングヒットを打たれた際或チームでは各内野手は絶てべ
ースライン上に立つてランナーの走力を鈍らせる策となる。
然し此れは運動家精神の上から見ても卑劣な行爲と云はな
くてはならぬ。斯かる場合内野手は自己を守らば壘上に
立つて外野からの送球を受くべきである。併し乍ら野球技
は敵の不利を計るのを目的とする以上斯かる場合各内野手
は壘の内側に立ち走者をして壘の外側を走らしめ自分でも
本壘への距離を遠くする必要がある。(圖解参照)
ロングヒットを打たれた時一壘手は走者が完全に壘を踏
んだか否か注意し、アウトツチの時は大聲で審判者に注意す

ベシの...
 △ ロングヒットの時ベースの中心に立つのは規則違反なり。
 ロングヒットを打たれた時ベースの中心に立つのは明かに



規則違反である。又衝突の危険があるから避くべきである。

第五 二壘手論

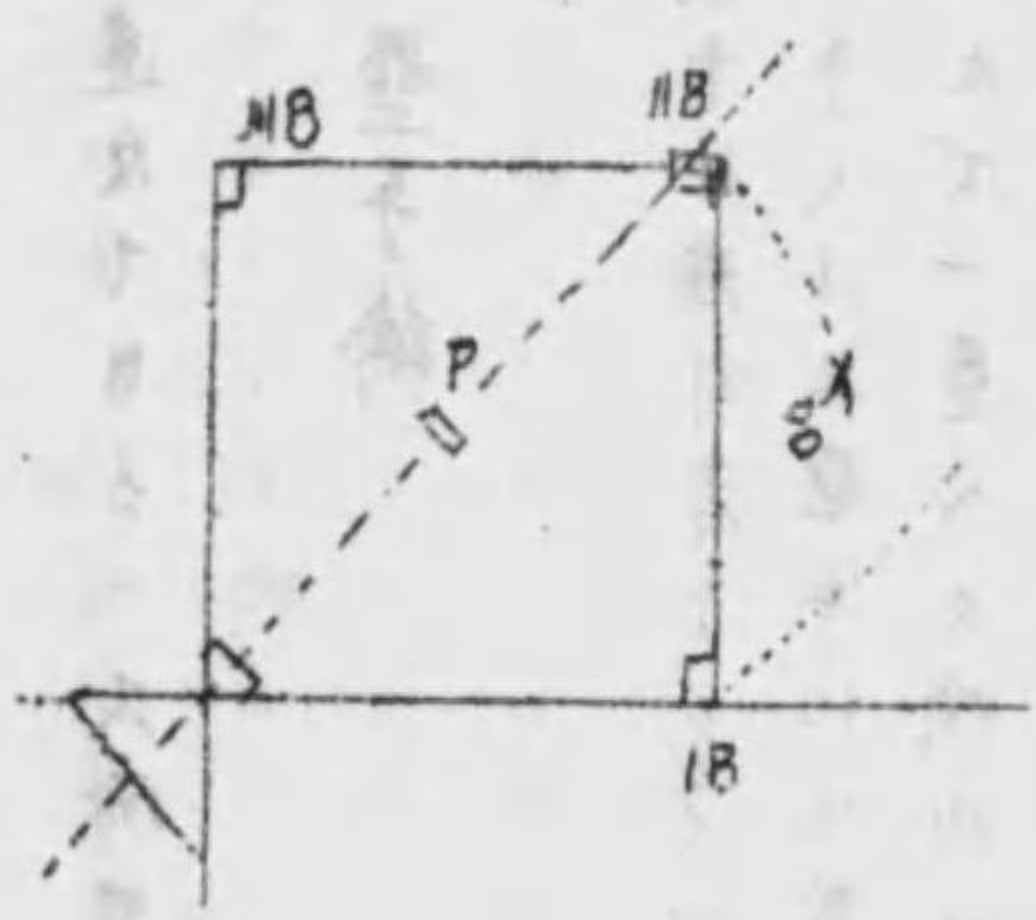
(一) 資格

二壘手は強打者なるを必要とす。遊撃手又は三壘手に比較して走力遅く且つ肩肩でもよし何故なれば一壘への投球は他のプレイヤーより距離短くて容易であるからである。このハンデーキャップを有して居る上から見ては攻撃力を以て守備力を補ふべきである。要するにグラウンダーを確実に握り得て打撃利く者は二壘手となるべきである。

(二) 守備

(A) グラウンダーに對する注意
 左右何れもグラウンダーも完全に取り得るもの何れの子

(B) 守備位置



二壘手は他の内野手より広い範囲を守備する。それは二壘方面は弱い球飛ぶ勝ちであるからである。従って二壘手はフライを捕る為のみに右翼の領域を守る事あり。二壘手の守備深く深ければそれだけ右翼手は深く深く守り得るのである。

ムにもなし。斯かる二壘手は他に優れた点を持ってゐても好きプレーヤーと云ふことが出来ない。若し二壘手であつて左右何れかに欠陥があることを発見したならば自信を得るまで練習すべし。一壘、二壘側に来るゴロは(右打者に打られたものは)きり水て来る故捕り難いものが多い。

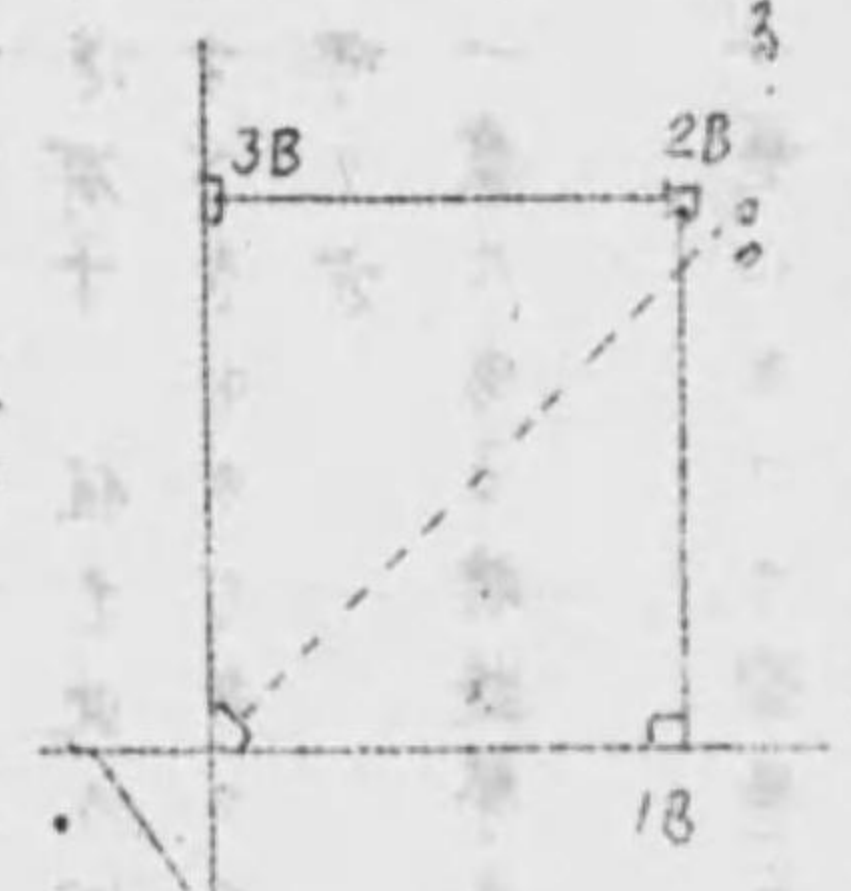
(C) 守備位置の移動

二壘手は其の位置の關係上捕手が投手に共へるサインを見其の位置を変更し他の野手に各自の位置を移動させる任務を有す。但し此の位置の移動は投手が投球後に速くになすべきものであつて投球前に決して動くべからず。

(D) 壘の守り方

走者一壘にある時遊撃手、二壘手は執北が二壘を守るべきか。走者一壘にあつて空壘を敢行する事を観破したならば遊撃手と二壘手のサインを以て執北が壘に入るかを協定し捕手の投球を捕るべし。二壘入壘を遊撃手定め置くときは走者は遊撃手の癖を諒知して其欠点を衝く不利益がある。然しこれは大抵投手トムでも行れておかない。此時のサインは遊撃手から出すのを便利とする。此の場合二壘手

入壘と定まらず捕手よりの投球は壘上目掛けてなされるものであるから走って捕り得る距離に近寄る必要がある。然し捕手が投げる以前に二壘に不タートすべからず、其後に空際を生ず。普通走者は打者の真正面に向つて立つべきで身は二壘に近く、足は一壘に向けるが完全な守備である。



- (E) 他ノ野手の後衛
- (1) 二壘後衛
- (2) 遊撃手二壘を守らば二壘手は壘の後方一間半位に立ち

- (1) 球の後進に備ふ
- (2) 一壘後衛
- (F) ダブルプレー

試合中二壘程がダブルプレーの多く行はる、ポジションはなす。打たれた球、他ノ野手方面に向つたときは一壘の後衛をなす。多くの二壘手は一壘の後衛を義務的に考へ、軽視してゐるが之れ仲々の重大な任務である。

試合中二壘程がダブルプレーの多く行はる、ポジションはなす。二壘手は此のプレーが行はる、時尤も重大な任務を有す。ダブルプレーは走者の走力に注意し走力迅速なる者、此のプレー可能な球を打つた時は、速に打つべし。打手走力鈍いものならば沈着に完全を期すべし。若し打たれた球を捕つた時二壘を守り遊撃手に強て投げる時は、速に依りトスで投げるべきである。二壘へ、二壘に遠く時は、壘に強いサイトスローを用ゆべし。

(G) 遊撃手との共同動作

○左翼に打たれた時は遊撃手入壘し二壘手後衛

○右翼に打たれた時は二壘手入壘し遊撃手後衛せよ

○弱肩を外野手を捕つては左翼に打たれた時は遊撃手右翼に打たれた時は二壘手其の球を取次に出づ

(H) 外野に打たれた時其の球を取次法

其の時は各々の外野手は其の反対の方面を後衛す 然し若

し中堅に打たれた時はロングヒットの場合二壘手入壘し遊

撃手取次に出づべし 此れは本壘に向つて走者が走るとき

二壘手より遊撃手の方本壘投球の確実さを多く有してゐる

による かく遊撃手二壘手の共同動作をなす機会多き故両

野手は常に相互の長所短所を知悉する様練習すべし

(I) バンドに對する二壘手の守備

バンドに對する注意

一壘手の守備に云つた様に一壘手がバンドに備へる為め淺

く守る時二壘手は一壘を守る場合一壘手は三壘に投げて間

に合はめと思ふときは直ちに二壘を守る遊撃手に投げて遊撃

手は又ダブルプレーを試みるべく一壘に投ずべし 此時二

壘手は普通の位置より前進してベースラインの上二壘

間の中央に立つべし バンドされ三壘に間に合はぬ時は直

ちに一壘に入つて遊撃手よりの投球を捕るべし

○走者三壘あつて打者バンドする時は二壘手は一壘間の中

央のラインより一。呎中に進み打手に接近して立つバンド

を捕へたら直ちに本壘に走者を刺すため捕手に投ずべし

捕手に投げる球は地上一呎の高さ、三壘に寄つた方面三

呎の所に投ずべし 若し餘裕あるは捕球後落付いて投ずべ

し 暴投は一点を許す

(5) 直盜守備法

ダブルシールド

走者一壘と三壘にあり一壘走者二壘に向つて盗壘しようとするのを見たならば捕手はトリックのサインを出せば投手の投球と同時に遊撃はプレートと二壘の中間に前進し二壘手は直方に入壘す。捕手は捕球と同時に二壘に送る低い球を投げ、此の時三壘走者本壘に突進したならば二壘手は「ホーム」と叫び遊撃手は此の声を耳にすると同時に其の球を取つて本壘に投げ若し三壘走者三壘に止まつてゐたならば「ホームライド」と叫び自ら其の球を捕つて一壘から来る走者を刺すべし。

第六 三壘手論

(一) 資格

- A 沉着
- B 強肩
- C 決断力
- D 敏捷

(二) 位置
 (イ) 守備の位置



(右打者の場合)

(左打者の場合)

A 三壘方面に来るグラウンダーは内野手最も強いのである。此を捕つて一壘に投げるのに狼狽すべからず。沉着なるを要する理由である。

B 三壘一壘間の距離は他のベースよりも遙かに遠い。だから強肩なる事が必要である。

C 三壘手は其の位置繁雑なれば其の場合に處して決断力に富むが肝要である。

D 直球バンド進退自由でなければ良三壘と云ふ難い。此の点に於て身体餘りに大きいものよりは小軀で敏捷なるものを選ばべし。

左打者の場合何故新く極端な守り方をさするかと言ふに左打者より三壘方面に打つは弱くて且つバンド三壘手にとって最も困難物があるからである。左打者が三壘方面に軟打すれば三壘手が一壘に投じて走者をアウトする事が困難である。(左打者でも三壘側に打つ癖のある者あり。此の場合には適宜位置を変へるがよい。)

打者の左右執れを問はず三壘方面に打たれた球はフォールボールに曲る傾向がある。

- (1) 二死以前にして走者二壘にあり
 定位置より少し壘に近づき姿勢は心持一壘の方面に向ふ様にするべし。投手の投球と同時に二壘の走者に注意し直ちに打者が軟打するか強打するかを注意すべし。(無論一死後は軟打せず)
- (2) 無死で左利打者の立つた場合尤も危険である。

二壘走者普通の走力あるものならば三壘手にとり最も苦痛である。此の場合左利打者に備へる守備位置に付て居たまらば三壘盗壘に際して捕手よりの投球を確捕し難い。ソレだからと云つて右打者に對する定位置に就くことにしたまらば軟打の守備をどうしませうか。三壘手の失策の大多數は實にこんな時を生ずるセウである。

此の際の守備は線上三壘から約一問半離れた處に位置し軟打に備へる姿勢をなし二壘にある走者に注目しつゝ、投手の投球と同時に打者に注意し軟打すれば直ちに前進すべし。グラウンダーなれば捕球と同時に二壘の走者に注目し壘を離れ過ぎて居れば牽制して帰壘させ然る後一壘に投ずべし。若し走者三壘に走るも隔壘して充分刺殺し得と見れば直ちに一壘に投ずべし。此の際の投球は出来る限り正確な速球でなくともはなすべし。

(3) 一死後走者ニ壘にあり

一死の後左右何れの手も軟打する事は概して無い故ニ壘走者に注意して居ルはよい

両軍得点の差僅少の時は三壘盗壘に絶好機會をれば打手が走者と共同して軟打の態度を見せ走者に三壘を盗する様をトリツクにかゝる事ある故能く注意する事が所要である 殊に敵が強チームであつて左打手の足の早いものが出た時は殊に危険である

(4) 走者三壘にあり

△無死定位置より一間乃至一間半浅く守る

三壘に走者ある故得点を許すと云ふことを餘り重大視して根柢するの事は不可である

△一死 上述の守備にてよし

△二死 走者のない場合と同じ

△左利打者の時はニ壘方面に位置を移動す

△ニ走者一三壘に在り

此の際には三壘走者の時と同じ守備でよいが捕手がニ壘上一壘走者を刺し難いと思ふ時三壘に投げる事あり故に捕手が投手よりの球を手にすると同時に飛壘すべし

(5) グランダーをハンブルした場合

ニ壘走者を本壘に刺し難いと思つたをらばニ壘を盗んた走者は多くなり場合ライバランするものであるから直ちに壘上にある遊撃手又は二壘手に投ずべし

注意 總て野手は一個の失策をしたからとて次の行動を間断してはならぬ

(6) 満壘の時

△一死満壘 三壘に走者ある時と同じ

△ゲームの終り又はセーム或は一塁の差ある時

(7) スクイズプレーの守備

スクイズプレーの守備をなすべし。若し此の時無死なればスクイズプレーに依り一點を得やうとするのは例外の戦法であるから強打の守備をなすべし。

フルーベイスの際スクイズプレーの守備は頗る容易である何となれば各野手は球を捕手に投げても捕手はそれをタツ

4 する必要がないからである。

注意 満塁の場合強打を可とする。軟打を以てスクイズする

二つの論者がある。然しこれは絶対的價値を有するものとは云へない。

守備組が強打に備へたならば軟打に備へたならば強打

と云ふ様を具合に変更すべきものである。

(8) 本壘への投球法

一死以前、グラウンダーに来たとき三壘に走者あつて本壘に

第七 遊撃手論

走つたならば出来る限り正確に捕手に送球すべし。其の投球はサイドスロウ又はアンダースロウを以てし捕手の右肩を目標に投ずべし。何と云ふれば捕手は捕球と同時に一壘に走る走者を刺さうとする故其の一壘投球に便にさするためである。

△スコアーに大差ある時は定位置を守つて完全に本壘に走者をアウトの数を増すべし。

(9) ヒットされた時

外野にヒットされた時は直ちに帰壘して万一に備へ満塁の時外野へ大飛球が打たれたならば外野手は本壘に投げて間に合はなければ他の壘へ投げるものであるからその時の必要上帰壘するのである。

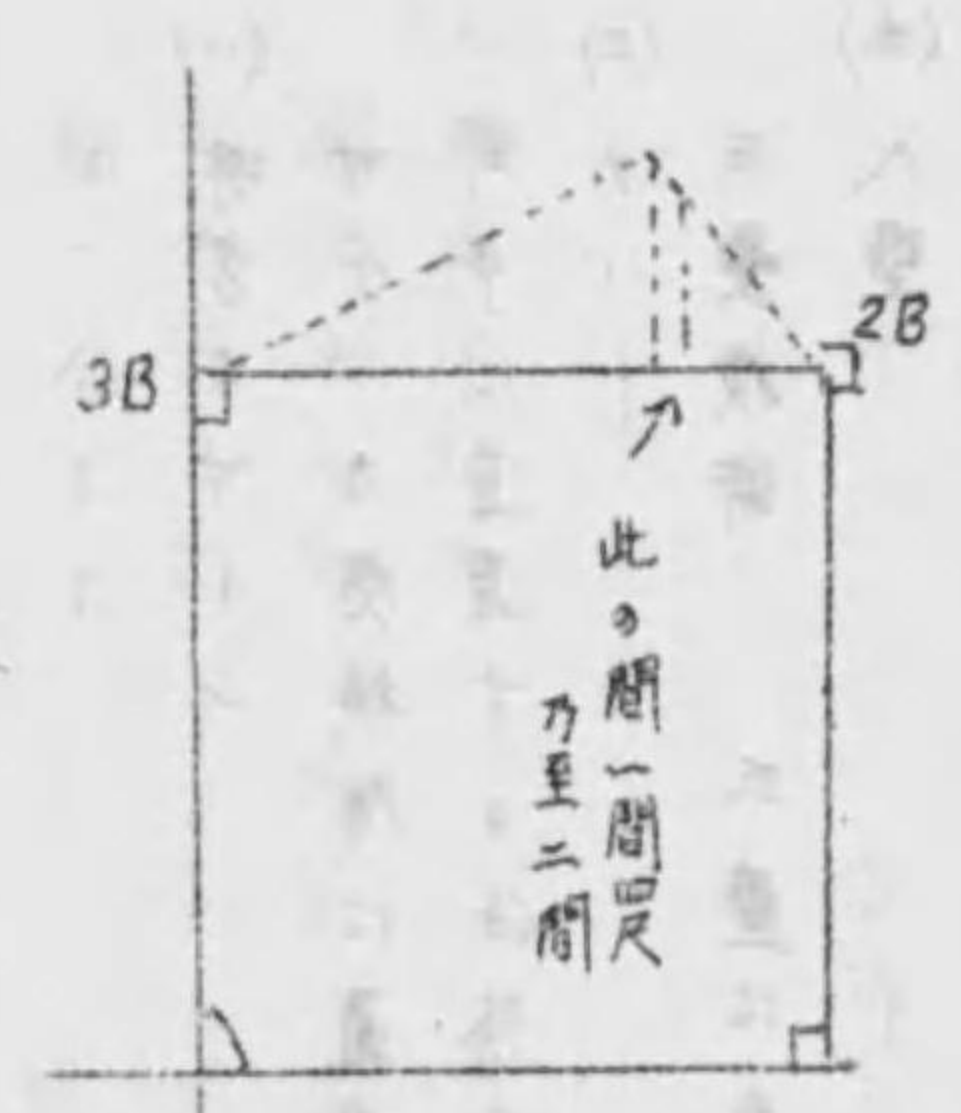
(一) 資格

- (1) 敏捷 (2) 強肩 (3) 勇敢

○速考 速走 速捕 速投
 完全な遊撃手は敏捷の一語に尽く。速に考へ、速に走り、速に捕へ、速に投ず。次に完全な遊撃手は同時に完全な一壘手、二壘手、三壘手、外野手となることが出来ぬ。遊撃手は投捕手、其他各内野手は助力に待つこと多く、單身で總べてを為し得るものでも、特に捕手及二壘手とは遊撃手に多大の光彩を添加すると共に無能力とする故に、三点の相互扶助はスコアに大なる影響を及ぼすものである。

(二) 守備位置
 位置変更
 ショートストップは常に其の位置を占めるに就いて腦力を働かす必要がある。遊撃手の位置変更の巧拙は其の技倆の

過半に價する。



通常ラインより一。呎乃至一二呎
 彼方三壘より三分の二位に立つ。
 一般に其の位置は前後左右自己の力量、打手の特長に依つて変更すべきもので出来得る限り深く守る可きである。1/4を守り得れば最もよし。

(三) 守備

(1) 難球

遊撃手の難球打たれたら多くは弱球である。
 緩いグラブ
 遊撃手は弱球を完全に處理が出来れば他の壘の如何な

る所も容易である」と云ふ程難物である。

(四) 投球動作

サイド、マウンド、オーバー、何れのスローも出来ることが必要である。其の守備範囲は内野中元も廣く前後左右幾度の角度で投球する必要あり。餘裕あればオーバー、スロウが安全であるが弱い球の場合は変則の投球をしなかつたならば間に合はない。

(ハ) 味方のサイン

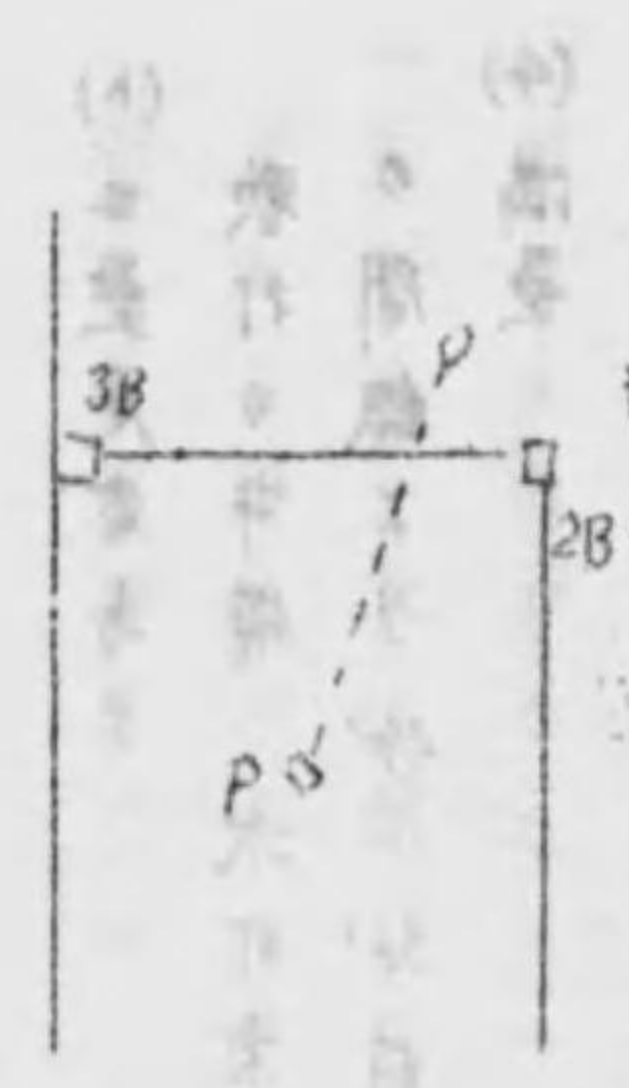
サインの交換所に通達すべし。遊撃手は交換所である。各野手に通達する任務を有す。

(ニ) カバー

三壘に未だ暴球に備へるためカバーすべし。

(ホ) 入壘

二壘入壘す。二壘をスチールする走者あれば大部分遊撃手



(ハ) 二壘走者あり。二壘を守る。此際は稍二壘に近く立ち身は本走者の牽制。遊撃手は砂を足で蹴りソマサキを立てる等常に走者を離れさせぬ様に努め猶ほ走者離壘し過ぎれば投手とサインを交換して刺すべし。國々如く投手走者遊撃手各一直線になつた時帰壘して刺し得べくこれに近くなつたならば断行すべしである。

其の時帰壘するに虚脱的動作の連続中に行ふことを要す。

(ト) 三壘走者あり

歌打の守備 次打者歌打しやうとしたならば投手と三壘手の間線より24' 30' 前進すべし

(ク) 満塁

投手と三壘手の中間ラインより10' の間を可とする

(リ) カブルシキール

此の時遊撃手は明晰な頭腦を以て果敢の廣置をしなくてはならぬ 位置はプレートとベース間に立つ此のプレートは二壘手の項に密である

前例 二壘手一人二壘に入つて守備する法あり

一壘走者を守る備へをして三壘走者本壘に突進したならば一壘走者の来るのを待たず直ちに本壘に返送して刺すべし 現今此のプレートを完成する捕手二壘手がな

いからこ水を行ふチームがない

第八 外野手論

(イ) 資格

(イ) 強打手たる事 (内野手より一徹的也)

(ロ) 駿足を多し (盗塁に巧みなこと)

(ハ) 耳の好き事 (バットの音を聞き那辺に飛んだか判る程)

(ニ) 強打者たる事

△外野手は總て強打者でなくてはならぬ 打順を見一奮から五番迄の中へ外野手を含んで居るチームは其他の總てに完全であると思はるべき

(ロ) 駿足なる事

△内野手に比し常に大球に接するのであるから廣く速に走らなくてはならぬ 此の駿足を以て走者になる時は大に其の特色を發揮すべし 盗塁の際に寧ろ大膽にスライドすべし

これは内野手と異り守備に就いても敵に襲はれる恐れがないからである。

(ハ) 耳の好き事

△耳の好悪は技倆に大関係あり。スタートに大影響あるからである。スタートの好きものは多少の鈍足でも往々難球を捕ることあり。

(ニ) 捕球上の心得

外野は如何なる凡籠球打たれても直ちに其の下に走って落ちるのを待たねばならぬ。安心して一杯に走り捕るは失策の恐れあり。風向の關係上ドロップしたりカーブすることあり。走って行き待って捕るといふ練習は意外の難球を捕ることを得。

(三) 難球又はヒットに對する走り方

難球で自分の側を抜かれた場合外野手は必ず後から追

ひかけてはならぬ。

即ち(B)の様を走り方をすべきである。



Bは(A)より遠距離の様に見ゆ。しかし

實際は(B)の方法がモーション付け易い。捕球後は急いで内野へ返送すべし。如何なる際も外野手が球を保持すること

絶対に無用である。

(四) 頭上真直のライバーさした球に對するバックラン

其の球に就いて真直にバックして取り得るものでない。即ちいづれかどつ避け已の側を抜かれたる球として走るときは走り好く又見當り易い。

(五) 左翼右翼に打たれた球

左翼又は右翼に打たれた球はフォールラインに流れる傾向があるからフォールラインの方に来たものとして走る必要がある。

(六) 中堅に打たれた球

中堅に打たれたものは真直のものなれば中堅手は自己の得意とする何れかの側に變更しても差支へなし。而し右打手の打った球は左翼に打たれたものは性質を左打手の打った球は右翼それと同じ傾向があるから各外野手は各種の球に接する必要上ノックを数多く捕るよりもフリドバツテングの球を處理する方実践に際して得る處があるのである。

七) 投球

外野手は常に自己の投球が如何なる廻轉をし又バウンド後何れかの方向に曲がるか等の性質と球速を知悉すべし。若し不規則を曲り方をするが又はオートバートバウンドに投げ得ぬ時は極力矯正し練習に努力すべきである。

投球の練習
左翼手 普通のフライを捕った時は二壘へ直球を投げ三壘

に走者あつて犠牲球となるとき又は満塁の際はホームにワ
ンバウンドに投ずべし。

中堅手 二壘三壘本壘への投球を練習すべし。

普通フライを捕った時は二壘へ一壘に走者あつてロングヒ

ットさしたときは三壘へランナーを捕った時は本壘に投

ず。此の投球は幾分三壘によつた方面に投ず可し。

(八) 取打に對する外野の守備

總ての内野手がバウンドに備へん為め決て守る時は外野手は
定位置より二間乃至三間前進し通常であつたならばシング
ルヒットになる球も捕る様に努めロングヒットは無論後進
せぬ意氣で守るべし。

内野手の位置と外野手の定位置とは非常に距り此の間一大
空地を作るが故に外野も同じく前進するものである。此の時
の打手は打たねばならぬとの念胸中に充滿する為め平常の

様にスウイングが不可能であるから突進に強打に変更しても
ロングヒットにならぬ事が多い。故に萬一のロングヒット
を豫想せず前近の様に決り守る方がよい。

◎走壘論

(一) 盗壘は必ずスライドせよ

壘間十五間の三分の一をスタート、三分の一をランニング、
三分の一をスライドすると云ふ。

走者は少くとも其の意氣がなくては不可である。而して盗壘
は必ずスライドするものとして決行すべきである。

(二) 盗壘を企てる時機

二ボール、オストライク、三ボール、一ストライク。

投手が次の投球に苦心するとき、二ボール、オストライク又
はストライクでボール三の様にどうしてストライクを投げや
うかと苦心して走者に注意の至らぬ隙を好機とする。

(三) 走り方

他を見ず走ル

打者が投手の球を打つて走者となつたでしようが此の走者は
決して他を見ず一壘目掛けて突進すべし。前方を見るときは
障害物を恐れる事となく故ラインを見詰めて走るべし。

(四) ロングヒットの時

壘の内側に左足をタッチし決して球の行方を見ながら走るべ
からず。故にコーチや一は走者の壘に達する前に其の壘を占
めた後の行動を命令すべし。

試合に對する注意

試合前第一にグラウンドの地形及び地質の堅軟に注意し、第二に風速の程度其の方向を觀測し沈着な精神を以て臨むべし。或るチームでは投手が「左翼手右へ、中堅手前へ」等と他の野手を驚かす言動も亦多し。是れは中等級又は実業チームが投手として主將の任に當つてゐる關係もあるが之れ誤つた仕事であつて投手はチーム中最重要のものであるから他の選手總掛で是を激勵に常に「シツカリヤレ」等の語を與して投手の氣の散むりを防ぎやみである。

コトクヤリの言動

コトクヤリは味方の走者打者に元氣をまさし敵の選手に混亂をさせる種々の言葉を使用すべきであるが他人が悪感を抱く様な言語の使用は絶対に慎むべきである。

宣傳用、商取引に、

丸之内便覽

丸之内居住者全部記載
四六判二百頁 實費金壹圓
送料 四錢
丸之内幸町 丸之内便覽發行所

運轉手志望者の良參考書

フォード自動車

操縱と修繕
定價金貳百八拾錢 送料十錢
丸之内幸町 東洋自動車協會
振替東京七六八七九番

重寶で經濟な

實膳寫印刷術

誰でも何處でも出来る
附 鐵筆使用法
定價金二十錢
丸之内幸町 日本實業學會
振替東京七六八七七番

事務希少者にと就業者へ

獨立立身の最好機關

何人も短時日容易に出來て利益多し
志望者は郵券封入問合せ
丸之内幸町 日本實業學會

317
842

告
本書購讀者は葉書
で本會宛通知下とい
會員として便宜をは
かります
會則郵券を要す

領價金二十五銭
大正十四年六月廿五日印刷
同十四年七月五日發行
昭和三年六月廿日印刷
同三年七月五日發行
東京市麹町區内幸町一五
編者 大日本野球研究會
同上
印刷者 立石榮太郎
同上
印刷者 榮文社
同上
發行所 大日本野球研究會
東京市麹町區内幸町一五
電話 銀座 五二二三番

榮文社案内
寫字、製圖、青寫、英、速記
文案、圖案、多量印刷、計算
單新、其他事務全般
臨時事務員並筆生米遣
宣傳先所名調査並名簿作製
廣告、ヒラ配撒布、木タテ懸、廣告設
騰寫印刷、活版石版印刷
騰寫、卷並附屬品販賣
高松市本町
事務補助
榮文社
東京市麹町區内幸町一五
電話 銀座 五二二三番
支店 世田谷区本町

宣傳、通信、一般事務用として
普通印刷の三分の一、五分の一、十分
經濟で便利な印刷器
印刷鮮明、使用簡易、能率倍倍
最新改良
立石騰寫器
と附屬品
印刷費用（定價表郵券を要す）
榮文社立石騰寫器本店
東京市麹町區内幸町一五

終

